

サイエンス・フィクションに見る クリティカルなポストヒューマニズム

根 村 直 美

Abstract

In this paper, it is argued that ideas and visions that correspond to the claims of “critical posthumanism” can be found in Western science fiction (SF) literature by exploring its history.

The idea of “unlimited human perfectibility” that emerged during the Enlightenment period and the technologies that attempted to realize it were, in early SF, a “threat” from the outside. Although not necessarily in the context of skepticism and anxiety, the scheme of human beings and the outside technology modifying them was maintained until the middle of the twentieth century. In contrast, writers who created New Wave SF in the 1960s and 1970s challenged the existing understanding of human beings by invoking the question of what human beings were, through the representation of the posthuman. This trend has been reproduced by the SF canon after cyberpunk, with representations of a “cyborg” that is part human and part machine. Thereby, from the trend, works that critically examine “Enlightenment humanism” as well as “the posthuman,” such as feminist SF, have emerged.

Thus, it can be argued that some works of SF literature have been an important resource in the construction of critical posthumanism.

I. はじめに

文化研究の論者たちが、情報技術の発展にともない、我々は今や「ポストヒューマン」の状況にあると論じて以来 (Hayles, 1999), 「ポストヒューマン」概念を通じた人間と人間社会の捉え直しの試みが蓄積されつつある。そして、その試みにおいて、クリティカルなポストヒューマニズムと呼ばれる動きがうまれつつある (Herbrechter, 2013 ; Nayar, 2014)。

ところで、「サイエンス・フィクション (SF)」は、2 世紀以上にわたって強化され補強された人たち、すなわち、「ポストヒューマン」についての物語を語ってきている。そこで、本稿ではまず、SF が「ポストヒューマン」をどのように描いてきたかを分析することの意義を明らかにすることを試みる。

続いて、欧米のSF文学の潮流を概観し、それらの中に現れているポストヒューマンやポストヒューマニスト的な社会についての考えやビジョンと近年のクリティカルなポストヒューマニズムの動きが、どのように呼応しているのかを探ってみたい。

II. なぜ「SF」なのか

文学理論家 Ihab Hassan は、1977年に、意識の内なる分裂および人類の外なる分裂を和解させるようなポストヒューマン文化が到来するという考えを表した論文を発表している (Hassan, 1977)。我々は確かに、Hassanの時代以来、ポストヒューマニスト的な文化に向かってきている。しかしながら、21世紀におけるテクノロジーと我々との関係は、テクノロジーの浸透とその社会への効果という観点からするならば、1970年代と共通点をもつ一方で重要な点でかなり異なる (Hauskeller, Philbeck and Carbonell, 2015: 2)。1970年代は、支配的な語りは、テクノロジーを、善かれ悪しかれ、主に人間と一緒に働く予測可能な力と見ていたのに対し、21世紀前半は、深いところで、我々とテクノロジーとは切り離すことができないという見解を採るようになってきているのである (Hauskeller, Philbeck and Carbonell, 2015: 2-3)。

Michael Hauskeller らは、200年間にわたるヒューマニストの枠組みを問題化してきているため、ポストヒューマニズムを非常に重要なものと見なし、次のように論じる (Hauskeller, Philbeck and Carbonell, 2015: 3)。まず、長い間のテクノロジーによる挑戦は、社会における政治的進化とあいまって、人々が自己に対する挑戦を受け入れることを助けてきた。テクノロジーと政治、これらの2つの領域は互いに支持しあい、ヒューマニズムの堅固な土台の裂け目を露わにしてきたのである。そして、学際的な言説としてのポストヒューマニズムの出現と発展において重要な要素となっているのは、人間を構成するものについての啓蒙主義的なヒューマニズムのレシピにおいてテクノロジーが欠落しているという主張である。ポストヒューマニズムはその出発点において、技術哲学と科学の社会学的批評とを結びつけ、いかに技術と対象が関係のネットワークに影響を与え人間世界を規定しているかについて示してきた。その一方で、こうした語りの多くは西洋のポピュラー文化の中に反映されているため、そうしたパラダイムシフトがいかに人間に影響を与えてきたのかを見て取るのに学者である必要はない。実際、人々の意識の中の変化は、未来のビジョンを反映し伝播する芸術によるところが大きいと考えられるのである。

その中でも、SFは、それが科学的・テクノロジー的な改変を現実的に描き、目的論、存在論、倫理といった関連の問題とともに、その可能性と実現性について議論しようとする意識の1つの形式を表現しているため、まさに“シミュレーション”である (Herbrechter, 2013: 116)。Stefan Herbrechterによれば、「科学と毎日の実践の間を媒介する力として、SFは、疑似的な空間、現実性と虚構性の間を漂うのである。その空間は、虚構的であり異化された現在であるとともに、まだ知られていないものとしての未来空間である。SFは、通常、科学とテクノロジーを通じて人間を定義することを主題として

いるために、我々のテクノカルチャー的な状況を説明することに貢献している。それゆえ、人間のあらゆるジャンルの中でもっともポストヒューマニスト的である。そして、SFは、すでにポストヒューマン化された環境を“異化”することによって、ヒューマニズム的な価値を人間存在論が不安定となるまでに揺るがしているのである」(Herbrechter, 2013: 116)。

かくして、Herbrechterは、事実として実現されているという意味よりもむしろ、文化的影響に基づいてSFを真剣に考察する必要があるとして、次のように論じる(Herbrechter, 2013: 117-118)。ポストヒューマニスト的になりつつある社会を批判的に読み解こうとするに際して、現在の文化的・想像的なものの中に認めることができる兆候を分析するための重要な資源の1つとして、SFを利用することができる。この想像的なものの中には、SFの中の、バイオ - , ナノ - , 認知テクノロジーをともなう未来志向的なサイエンスが含まれる。サイエンスとフィクションの間、科学的な事実と未来学的なフィクションの間の明確な分離は、ラディカルな小型化、デジタル化、サイボーグ化、ヴァーチャル化、メディア化の時代においては可能でもなければ望ましくもない。様々なユートピア的・ディストピア的SFのシナリオは、道徳性・価値・タブーの交渉の中で境界線を取り締まることに役立っているが、その一方で、それらは、境界線の最終的な置換によって引き起こされる文化的な変化の受容を可能にしていることも明らかになってきた。それらは、抑圧された欲望や様々なポストヒューマン化傾向への反応としての不安が顕在化されたものなのである。

Ⅲ. 欧米のSF文学におけるポストヒューマン

続いては、*Literature and the Posthuman* (Bruce Clarke and Manuela Rossini, eds., Cambridge: Cambridge University Press, 2017) に収められた Lisa Yaszek と Jason Ellis の論文、“Science Fiction” (pp.71-83) を通じて、欧米のSF文学におけるポストヒューマン表象を概観してみたい。なお、本稿で言及するSF作品については、引用・参考文献一覧とは別に、発表された順に並べ一覧表示することとする。

1. 進歩と改良可能性

ポストヒューマンについての思索は、人間に関する諸々の新たな観念とともに、啓蒙主義の中で生じた。17・18世紀の何人かの思想家たちは、人間主体を“ユニークな本質をもち、その目標が自己実現であるような存在”として賛美した。このユニークな自己は、理想的な世界では、個々人の自己実現をうながすように設計された諸制度と相互作用する。それはまた、ユニークな物理的身体に宿るものであった。同時に、啓蒙主義的思想を非常に特徴づける物質主義的経験主義の強調は、Julien Offray de la Mettrie や Marquis de Condorcet のような哲学者が、動物や機械と同様に、“人間の能力の改善には限界がなく”，したがって、“人間の改良可能性に限界はない”と提案することへとつながった。そうした思想家たちは、近代の人間を、壮大な宗教的、あるいは、科学的計画の終着点ではなく、そこから新た

な種全体をつくりだす生の素材と考えていた。

限界のない人間の改良可能性という啓蒙主義的な理念に関わる物語は、SF的な思索の最初の世紀を支配した。1800年代の初期には、Mary Shelley, Nathaniel Hawthorne, Edgar Allan Poeが、限界のない改良可能性を批判的に評価するために、モルヒネやジギタリスなどの薬物の発見、自然な動きをまねるように設計された補装具や電磁気への人々の熱狂を利用した。彼らの、自分自身と自身の愛する人たちを改良しようとしたマッド・サイエンティストについてのゴシックSF物語は、特に人間の性質の操作に関わる場合に、我々はすべての知識をもっているという確信を台無しにした。Shelleyの“The Mortal Immortal (1833)”, Hawthorneの“Birthmark (1843)”と“Rappaccini’s Daughter (1844)”はどれも、心的および身体的欠陥を治癒するだろう霊薬を探求するうちに、共同体の基準をなげうったマッド・サイエンティストをめぐる物語が展開する。いずれも失敗するのは、ある性質を十分に理解できずコントロールできないからである。Poeの風刺的な“The Man That Was Used Up (1839)”は、読者に、補装具なくては、無力なしゃべるぼろきれの塊でしかないことが明らかになる戦争の英雄を提示した。ここでのポストヒューマンの異様な身体は、単に、1人の利己的な科学者の狂った夢なのではなく、軍の支配に屈した社会全体の恐ろしい狂気を表している。

この時代から、たいていのポストヒューマニティについてのSF物語は、新たなテクノロジーと対話しているが、それらの多くは、新しい科学理論に関わっている。邪悪なテクノロジーの利用の危険についてのShelleyの警告は、最先端の科学理論によって支えられている。Shelleyは、*Frankenstein* (1818)が誤った生殖モデルを受け入れたがゆえ、そして、誤った種類のテクノサイエンスの利用を行ったがゆえに失敗をしたことを示唆することにより、父系単性の両性生殖の優位性に関するErasmus Darwinの理論を想起させている。

2. 初期SFと進化

*Frankenstein*のうちに暗に表現されていた進化論的なテーマは、1880年から1945年の間に出版された多くのSFにおいて明示的に表現されるようになったと言える。この時代は、独自の作者、形式的な作法、出版の場をもつ、明確でポピュラーなジャンルとしてSFが確立した時代であり、また、人間の起源に関するCharles Darwinの理論についての議論が高まりを見せた時代でもあった。

Darwinに対する広範囲にわたる反応はこの当時の公の議論を特徴づけるものであるが、ダーウィニズムとそれに対抗する他の進化の理論に関する科学的議論、社会ダーウィニズムに対する人々の関心、進歩的な変化というダーウィンの政治的読み直しを含め、それらはすべて、SFの物語の中でドラマ化されている。Shelleyと同時代人は啓蒙主義的な人間の改良可能性という夢を批判的に評価したのに対して、世紀の変わり目の作家たちは、様々な進化哲学の様式を探究し、ポストヒューマン的な未来の創造について語る新たな物語形式を多種多様にうみだした。

そのような多様性は、この時代をはさむ2つのイギリスのSF小説に明らかに認められる。その1つはH. G. Wellsの*The Time Machine* (1895)であり、もう1つはOlaf Stapledonの*Last and First*

Men (1930) である。科学者が“人間の遠い未来を理解するのを助けるため”の装置を発明する、Wells のタイム・トラベル物語は、社会ダーウィニズムをヴィクトリア時代の社会の階層化と産業成長という問題の解決策として評価した。Wells の語り手は、802 年と 701 年に行き、そこで高度なテクノロジー文明の廃墟に生きる美しいが無力なエロイ族と、醜いが手先が器用でエロイ族を世話し食べるモーロック族と出会う。その後、その語り手は、産業社会は一時的なユートピアをうむかもしれないが、そのようなユートピアは続くことはありえず、結局はすべての意識ある生命の停滞と終焉に終わるということを人間の進化から生まれたその 2 つの種族が示唆している、と悲観的に結論づけている。対照的に、Stapleton のより楽観的な遠い未来の歴史は、長大な期間にわたってゆるく結びついた一連の物語を通じて、Henri Bergson の創造的進化の理論、すなわち、進化を自然の創造的な起動力、言い換えれば、生の躍動と結びつけたダーウィニズムの対案をドラマ化したものである。*Last and First Men* では、後に続く人間の種につながる創造的精神は、地球の住人が様々な自然的・テクノロジー的な災害に打ち克つこと、そして、多元的な性をもちテレパシーがあり宇宙旅行ができるポストヒューマンをうみだすことを可能にする、と想像されている。Stapleton の小説は、人間が自分自身を 2 つの非常に異なる仕方に変容させる可能性を想像した最初の SF の 1 つであるのは明らかである。多くのキャラクターは、新たな種を発展させるのに必要とされる唯一の物質として人間の身体についての定説にしたがっている。しかしながら、よりラディカルな人間の身体の再設計を提唱するキャラクターもあり、まったく新しい物理的・精神的属性を身体に導入し、その祖先からの残存物がもはやまったくくないような種の創造を確かなものにしようとしている。

世紀の変わり目のアメリカの作家は、数世紀の短い間に、人間がいかんにして限界のない改良可能性に向けて進歩していくかを示すためにユートピアの形式を用いた。例えば、George S. Schuyler の *Black Empire* (1936-38) は、ディストピア的な奴隷制度が、意図せずして、どのようにポストヒューマンの進化をうみだすかを示すために、圧縮されたダーウィニズムを用いている。また、計画された進化も、この時代のアメリカの雑誌の中では隆盛であった。例えば、C. L. Moore の有名な “No Woman Born” (1944) は、ひどいやけどを負った女優の脳をメカニカルな身体へと移植することによって人間未満の存在（サブヒューマン）をうみだしたと考える科学者とポストヒューマン的な力、鋭敏さ、セクシュアリティを喜ぶその女優自身の間の議論を通じて、ポストヒューマンに対する異なる態度を描いている。

3. 20 世紀中ごろの SF と突然変異譚

20 世紀半ばのアメリカの社会的・テクノサイエンス的な発展に対応して、初期 SF 専門誌に関わった作家たちは、ポストヒューマンについての重要で新しいストーリーを展開させた。それは、SF の批評家 Brian Stableford と David Langford が “突然変異譚” と呼んだものであり、意図的、あるいは、偶然的個人の遺伝子操作が “よりよくより分別のある人間の育成” を引き起こしている。1930 年の “不適格者” の扱いについての優生学的な議論は、ナチのプログラムへの社会的な非難、および、1940 年代・1950 年代の広島・長崎の生存者への放射能の影響についての認識の広がり結びつきながら、作家た

ちに、進化とポストヒューマンとに興味をもたせ、優生学についてのストーリーから突然変異の物語へとトピックを変化させた。A. E. Van Vogtの*Slan*(1940)、Arthur C. Clarkeの*Childhood's End*(1953)、Theodore Sturgeonの*More Than Human* (1953) など、この時代のもっとも有名な物語の中では、ポストヒューマンは、1世代あるいは2世代のうちに起こる“自然の突然変異”からうまれている。Judith Merrilの“*That Only a Mother*” (1948)と同様、Lewis Padgett (Henry Kuttner)の*Mutant* (1953)、Phyllis Gottliebの*Sunburst* (1964) など、その他の物語の中では、突然変異したポストヒューマンは、原子力エネルギーをとまなう人間の実験の偶然的な副作用として出現している。突然変異の仕方がどのようなものであれ、20世紀半ばの作家たちは、ポストヒューマンの通常の人に対する優位性は、仲間とつながり協同することを可能にする、テレパシー能力の発達によって特徴づけられるであろうことに同意している。

20世紀半ばのSF作家たちは、ポストヒューマンの未来の到来を祝福していた。しかし、彼らは、そうした存在が人間から受けることになる迫害に対しては鋭く認識していた。Van VogtとPadgettの小説のポストヒューマンは、人間の大量虐殺から逃れることに多くの時間を費やしており、また、SturgeonとGottliebの物語に登場するポストヒューマンは、互いが互いを見つけだすまで、遺棄、よるべなさ、収容などを生き延びなければならなかった。しかし、変化に対して人間がもつ偏見へのもっとも冷静な非難は、Merrilの“*That Only a Mother*” (1948)、Carol Emshwillerの“*Day at the Beach*” (1959)、Mary Armockの“*First Born*” (1960)のような家族的なSF物語の中に見ることができる。それらのすべては、ポストヒューマンの母親の経験を、現代社会における社会的不正義がジェンダー化された性質を帯びていることについてコメントするチャンスとして利用している。どの物語でも、第2次世界大戦が勃発する中で生きている女性は、自分の赤ん坊が何か異質なもので、彼女の観点からすれば、まったくもって人間以上のものである。それぞれはひそかに自分の子どもの差異を認識している一方で、そうした子どもを無慈悲に殺そうとする世界から隠さなければならない。そこには、文字通りテクノサイエンス的な罪の結果に直面しなくてよいように、自身の子どもに“そうしたことを行う”父親も含まれている。まとめるならば、そのような物語は、20世紀半ばの市民権の主張、および、人口の大部分の人たちに対する平等権を否定する限りは、合衆国は自身を民主主義の国と呼ぶのは妥当ではないと論じた平和活動家の主張を反映しているのである。

4. ニュー・ウェーブSF

20世紀の半ばには、突然変異とそのハードサイエンスの祖である核兵器類が人々の想像力を捉えたのに対して、心理学、人類学などのいわゆるソフトサイエンスが、人間の条件の理解のための学問としての意義を確立しつつあった。これらの発展は、来る“認知的革命”と、人間の脳とコンピュータテクノロジーとの関係を理解する方法としての認知科学の開始のための基礎を用意した。SF作家たちは、文学的で実験的なSFの新たな様式をうみだすために、内面に焦点を当てたこれらの科学による物語の可能性に注目した。ニュー・ウェーブSFと呼ばれる作家の多くにとって、ポストヒューマン的なサイ

ボーグと他の技術的に強化された存在は、計画された脳と身体の変形が、いかに人間とは何かという我々の理解に挑戦しているかについての探究を可能にするものであった。そうしたキャラクターの中には、外科的に改変された非常に知能の高い Daniel Keyes の *Flowers for Algernon* (1966) の Charile Gordon や Ursula K. Le Guin の *The Left Hand of Darkness* (1969) の遺伝的に改変された両性具有者などが含まれる。

Philip K. Dick の作品は、認識的そして物理的な変容としてのポストヒューマンの探究を通じて、初期の突然変異的譚とニュー・ウェーブ SF とを結びつけた。物語の多くで、核兵器テクノロジーと近代薬学が、予知・テレキネシス・テレパシーなどの特別な認識能力とともに身体的な異常性をもつポストヒューマン的存在をうみだしている。例えば、*Dr. Bloodmoney, or How We Got Along after the Bomb* (1965) において、Edie Keller という双子の兄弟であり封入奇形胎児である Bill は、誇大妄想的でテレキネシスでアザラシ肢体症の Hoppy Harrington に打ち勝つことでコミュニティを救っている。他の物語では、Dick は、人工的存在に焦点を当てている。例えば、*Do Androids Dream of Electronic Sheep?* (1968) では、超人的なネクスス 6 型というアンドロイドを登場させている。ほとんど人間と区別できない、これらのアンドロイドは残酷な人間の主人から逃げだし地球に逃れるが、そこで、賞金稼ぎのハンター Rick Decard に“引退”させられたり殺されている。Dick の小説の多くと同様、*Do Androids Dream of Electronic Sheep?* は、感情と共感がいかに人間性を特徴づけるのかを探究しているが、この小説においては、著者は、ポストヒューマン・アンドロイドがある面では人間の創造者よりも共感力をもつことを明らかにすることにより、人間／ポストヒューマンの二項対立を問題視している。J. R. Isidore というキャラクター、核の投下によって遺伝的に傷つけられた“特別な”人間は、その小説を初期のミュータント物語と結びつける。初期 SF のポストヒューマン的存在と比較するとありふれた存在である一方で、その動物・人間・人工生命と共感する特別な能力は、Isidore を Dick の小説の他のキャラクターとも SF の初期の歴史全体のうちに見いだせるものとも異なるものとしている。

Dick が認識という面でポストヒューマンに焦点を当てたのに対して、Frederik Pohl の *Man Plus* (1976) は、ポストヒューマン的な変容にとっての身体的重要性を探究した。最初に火星に行ったサイボーグの死後、Roger Torraway は、火星の環境を生き延びるように再設計された身体から受けとる感覚情報に対応するために、侵襲的な認識能力の改変を受けた。新しい身体と火星の相互作用に対応して彼の脳が変化するにつれて、Torraway は消えゆく人間性と表れてくる他者性を受け入れざるを得なくなる。Pohl の *Man Plus* は、ポストヒューマンの経験が、与えられた環境のために設計された身体に依存していることを明らかにしている。その一方で、Joseph McElroy の *Plus* (1977) は、Imp Plus、すなわち、地球の軌道を回る地球観測プラットフォームのコントロールシステムにつながれ脱身体化した人間の脳が、ワイアーでつながれた存在から目覚め、言語・思考・記憶を再び手に入れるようになり、さらには、管理者の元々の目的ではなく、自身の目的のために自身をポストヒューマンの身体へとつくりあげるためにテクノロジーを転用するようになる様を描きだしているのである。

5. サイバーパンクと AI

20 世紀半ば以来の遺伝学・ナノテクノロジー・コンピュータ科学・エンジニアリングの分野での成果が頂点に達する 1980 年代の初期までには、ポストヒューマン的存在の科学的・テクノロジー的な可能性は、SF の想像力をしのごうとしているように見えた。さらに、“ムーアの法則”の運用は、1980 年代の“デジタル革命”を民主化し、情報革命のはじまりを導いた。コンピュータ、遺伝子工学、ナノテクノロジーなどの想像力に満ちた可能性は、William Gibson, Bruce Sterling, Pat Cadigan を含むサイバーパンクと称せられる SF 作家世代の関心を捉えた。サイバーパンクの著作の多くは、人工知能、人工生命、遺伝子工学、ナノテクノロジー、ヴァーチャル・リアリティなどを含む 20 世紀後半のテクノロジーにより、いかにして、人間の身体が改変され人工的存在が創造されるかを探究している。例えば、Pat Cadigan の *Synners* (1991) は、コンピュータと個々人の間を接続するためのサイバネティックな増強に依存する荒廃した未来を描いた。

サイバーパンクの物語は、テクノロジー的に増強された他の存在形式についても考察している。*Neuromancer* (1984) を含め、Gibson の小説の多くのキャラクターは、デジタル的で脱身体化されたものとしてのポストヒューマンを表象しているが、生物学的で身体化されたものとしてのポストヒューマンを表すキャラクターも登場する。その小説のあいまいな終わりは、ポストヒューマンは自然と人間と知的な機械の間のポジティブな関係を象徴するものとしてつくりだすことができるのだから、黙示録的な人間主体の消滅としてのポストヒューマンという見解に黙ってしたがう必要はないことを示唆している。

SF 物語は、リアル・ワールドのテクノロジーの発展への応答とサイバーパンクの語りに拠って立ちつつ、到来が予想されている「テクノロジー的な超越」の瞬間をめぐって構想されるようになっていく。それは、“シンギュラリティ (特異点)”と呼ばれる。シンギュラリティは、元々は数学者であり SF 作家である Vernor Vinge によって提案されたものであるが、人間のテクノロジー、特に、コンピュータや AI のスーパー知能と、コンピュータとの相互作用あるいは薬物による人間の知能の拡充が、遠く離れた予期できないような領域に向かい加速していくという、仮説的な時間上のポイントである。Vinge が言うように、それは、旧式のモデルが見捨てられ、新たな現実原則へ変わらざるを得ない地点のことである。その小説 *The Cassini Division* (1998) の中で、Ken MacLeod は、それを軽く“オタクたちの頂点”と呼んでいる。

6. フェミニスト SF

Donna Haraway は、「サイボーグ宣言」において、戦略的な観点からポストヒューマンを捉え直し、進歩の可能性のエンブレムとしてのサイボーグの流用を論じている (Haraway, 1991)。Haraway は、そうした点で、フェミニスト SF が特に重要なことを確信している。Shelly が 1818 年に *Frankenstein* を出版して以来、女性は、思惑的なフィクションに対して、とりわけ、ポストヒューマンの将来の見込みと危険性を探究する際に、重要な貢献を果たしてきた。しかしながら、サイボーグ戦略が科学、テク

ノロジー、ジェンダーについての物語の中心になってきたのは、1960年代の女性解放運動の出現と1970年代の明白に政治化されたフェミニスト SF の発展以降であった。

Joanna Russ の *The Female Man* (1974), Marge Piercy の *Woman on the Edge of Time* (1976), Suzy McKee Charnas の *Motherlines* シリーズ (1974, 1978, 1994, 1999) を含め、フェミニスト SF 物語の第1世代は、バースコントロール・ピルの合法化と人工授精の初期の成功に刺激されて、ポストヒューマン的で非家長制度的な未来をイメージしてきた。そこでは、新たな生殖テクノロジーは、女性たちが、新しい方法で科学と社会とセクシュアリティの関係を認識し直すことを可能にしている。また、Pat Cadigan のようなサイバーパンク作家、Kathleen Ann Goonan のようなポスト・シンギュラリティ作家、Octavia Butler のようなアフリカ黒人未来派芸術家を含む、第2世代のフェミニスト作家たちは、新たな情報テクノロジーと、市民権や環境問題など他の社会正義の問題が、ポストヒューマン的フェミニストの未来の創出にどのような影響を与えることになるかを探究している点において、先行する世代の作品に拠って立っている。まとめるならば、そのような作品は、ポストヒューマンと、エイリアンや人工的存在などの非人間の協力が、以前の人間に向けた政治的アクティビズムの様式がなしえたよりもよりよい形で正義を確保をするような、心理的・社会的組織の様式をいかにうみだすかを描いているのである。

この潮流にある特に目を引くフェミニスト SF の2つの例は、Russ の *The Female Man* と Butler の *Xenogenesis* (1987-1989) のトリオロジーである。*The Female Man* は、同じ遺伝子型をもつが、年齢、環境、教育、食事、学問など、4つの異なる“世界の可能性”によって変容する4人の女性の間の類似性を探っている。また、Butler のトリオロジーは、テクノロジーに媒介された生殖の問題を物理的・文化的な情報の転移の問題と結びつけることにより、第1世代のフェミニスト SF の作家の関心に拠って立つ。それは、第3次世界大戦を生き延びた人間と、3つの性をもった異星人で遺伝的に操作された種属である Oankali 族との間の協力のポスト黙示録的な物語を通じて、性的な他者性と人種的な他者性の両方を批判的に検討している。Oankali 族は、その遺伝的多様性を増やそうという気持ちを持ち、遺伝子を他の生命形式と交換しあっているので、常に“ポスト”であり続けている。このように、Russ と Butler のフェミニスト SF は、多くの文学的・ポストヒューマン的 SF の象徴である。過去の不正と過ちをただすことによってのみ、よりよいであろう新たな人間がよりよい未来をうみだすことができる。同様に、フェミニスト SF は、人間が将来どうなるのかを想像することによって人間の過去と現在を批判するために、あらゆるポストヒューマン的な SF の想像力を結集するのである。

IV. クリティカルなポストヒューマニズムの系譜の探求に向けて

続いて、本節では、欧米の SF 文学においてクリティカルなポストヒューマニズムの系譜を探る試みを行うために、クリティカルなポストヒューマニズムの中核にある考えがどのようなものなのかを明らかにしたい。本稿においては提示するクリティカルなポストヒューマニズムの考えは、主として

Herbrechter の議論を参考にしているが、筆者自身が捉え直したものである。

1. テクノロジーに対するポスト現象学的アプローチ

20世紀末と21世紀初めのテクノロジー的な発展が加速的に激しく進んできたことは否定しえないように見える。そして、Herbrechter が言うように (Herbrechter, 2013:19), 現在の文化においては、“テクノカルチャー” と呼ばれるのが通例となるまでに、科学、文化とテクノロジーの境界線が浸食されつつある。そのテクノサイエンス的な文化は、もはや多くの中の1つの文化的・政治的構成要素ではなく、支配的で制度化された経済的・イデオロギー的な力であり、基本的なレベルで、人々が共に生きるあり方、アイデンティティを形成する仕方、個々人の身体表現の諸形式に影響を与えているのである。

このような状況は、人間と技術との関係に関する我々の理解を大きく変えつつある。その新たな理解はポスト現象学的アプローチとも称される (Verbeek, 2011: 14-17)⁽¹⁾。そのアプローチは、人間とテクノロジーの関係の基礎にある相互浸透性と相互依存性を考慮しなければ、人間もその生活世界も理解できないと考える。そのアプローチは、生活世界での判断や実践がますますテクノロジーとの相互作用の中で形成されるようになってきている現代のテクノカルチャー的状况が、そうした人間とテクノロジーとのハイブリッドな関係性を顕在化させたと考えるのである。

こうしたポスト現象学的アプローチと軌を一にするクリティカルなポストヒューマニズムは、人間とポストヒューマンと非ヒューマンの間の根本的な相互浸透性と相互依存性という考えに基づき、人間とテクノロジーの関係を分析することを課題とするのである。

2. ヒューマニズム批判

クリティカルなポストヒューマニズムは、人間と人間性を、イデオロギーから自由な超越的概念ではなく、歴史的なものであり文化的構築物であるとし、さらに人間を歴史の中心におくのではなく、様々な絡み合った生の諸形式1つと見なしている。クリティカルなポストヒューマニズムは、主体やアイデンティティの構築性やその特質の状況依存性を前提とするのである (Herbrechter, 2013: 12-13)。

言い換えれば、クリティカルなポストヒューマニズムにおいては、それぞれの場面を織りなす行為主体たちは、他者とのネットワークと相互作用の中で構築される身体を通じて現れると捉えられていると言えよう (根村, 2016)。行為主体性の現れとともに構築される身体=構築される身体とともに現れる行為主体性、それが、クリティカルなポストヒューマニズムの想定する<主体>や<アイデンティティ>と考えられるのである。

3. <異質な他者>の排除と抑圧に対する批判

また、クリティカルなポストヒューマニズムは、ヒューマニズムのうちの排除と抑圧のメカニズムを可視化するがゆえに、新たなテクノロジーに目を向けている (Herbrechter, 2013: 28-29)。

新たなテクノロジーは、新しい人間についての問いを引き起こすにとどまらない。<機械>は人間が

まさに自分自身を<異質な他者>から区別する伝統的な形式の1つであるがゆえに、新たなテクノロジーは、ヒューマニスト的なカテゴリーと排除のシステムに挑戦している。そのシステムとヒエラルキーは、人間の本質という神秘的な観念によって支えられたものであり、また、人間の本質というのは、包摂と排除の過程を認可し永続させる装置となっている。そして、このことこそが、クリティカルなポストヒューマニズムがテクノロジー的な変化という側面を軽視しない理由であるが、それはまた、クリティカルなポストヒューマニズムがテクノロジー的な変化を理想化することを防いでいるのである。

V. 欧米 SF 文学に見るクリティカルなポストヒューマニズム

本節では、先に示した欧米の SF 文学の概観に基づき、SF に現れた視座とクリティカルなポストヒューマニズムとの関わりを分析していくこととする。

1. ポスト現象学的なアプローチについて

まず 19 世紀の SF の先駆的作品について考えてみよう。Shelly の *Frankenstein* などに見ることができるのは、限界のない人間の改良可能性という啓蒙主義的な理念に対する懐疑であり、その啓蒙主義的な理念を実現しようとするテクノロジーに対する不安と言える。その根底には、テクノロジーは、人間の生活世界の外部にあり、人間の生活世界の中に入り込んでくるものという認識がある。テクノロジーは、人間の外部にある<脅威>という捉え方をしていたと見ることができるであろう。

それに対して、SF というジャンルが確立した世紀の変わり目の作家たちは、必ずしも懐疑と不安ばかりではなく、多種多様な形でポストヒューマン的な未来の創造について語るようになった。そして、20 世紀半ばの SF 作家たちは、ポストヒューマン的存在が人間から迫害を受けることを予感しつつも、ポストヒューマン的な未来の到来を必ずしも否定的に受けとめていなかった。しかしながら、20 世紀半ばまでの SF 作家たちの発想は、人間とミュータントという対立軸を維持し、人間とその外部にあって人間を改変するテクノロジーという図式を離れてはいなかったと言える。

この状況に変化が現れるのがニュー・ウェーブ SF においてである。ニュー・ウェーブ SF の作家においては、ポストヒューマンは、人間とは何かという問いを呼び起こす存在であり、既存の人間理解に挑戦するものでもあった。こうした動向は、ニュー・ウェーブ SF がコンピュータ科学とエンジニアリングの発展を背景としていることによると考えられるが、この流れはテクノロジーと人間が融合したサイボーグ表象が登場するサイバーパンク以降の SF に受け継がれていくと見る事ができる。

2. <啓蒙主義的ヒューマニズム>に対する批判的視座について

道徳的能力を含む人格的特徴やアイデンティティを有する点において他の存在に優越することを信じるという意味での<啓蒙主義的ヒューマニズム>に対する批判的な視座というものについて見るならば、それがはっきりと認められるのは、やはりニュー・ウェーブ SF 以降と言えるであろう。Shelly の

Frankenstein においては、ポストヒューマンの存在によって、啓蒙主義思想が“ユニークな本質をもち、その目標が自己実現であるような存在”として賛美する人間主体が疑問にふされるといよりも、脅威にさらされていると言えよう。また、20世紀半ばまでのSFもまた、人間性を批判するよりも、人間性の改良可能性をよしとする姿勢が見て取れるのである。

Dick の作品中には記憶も感情ももち自分が人造人間であることを認識していないアンドロイドが登場する。そうしたアンドロイドの存在のおかげで、主人公は人間とは何かを問わざるを得なくなる。また、自己をつくりだす人間の「記憶」も「共感」という人間性も、それほど確固としたものではないことも示唆されている。人間とその人間性は、超越的な概念ではなく、歴史的なものであり文化的構築物であるという考えが示されるようになるのである。

3. <異質な他者>の排除と抑圧に対する批判について

Shelly の *Frankenstein* 以来、SF において描かれるポストヒューマンの多くは<異質な他者>であったと言ってよい。そして、<異質な他者>に対して人間がどう考えどう振る舞うかがその作品世界の骨格を形づくっていると見ることもできる。

しかしながら、Shelly の *Frankenstein* は、<異質な他者>が人間社会においていかに排除され抑圧されることになるかを主題にしていたとは言えないであろう。結果的に、そうした構造とメカニズムを映しだしていたとしてもである。これに対して、20世紀中ごろからのSF作家、とりわけ、フェミニストSFの作家たちは、<異質な他者>の存在を描くことを通して、人間の過去と現在を批判することに意識的に取り組んできている。これらの作家たちは、限界のない人間の改良可能性という啓蒙主義的なヒューマニズムの理念とは一線を画する。むしろ、それらの作家たちは、<異質な他者>に対する排他的な実践をうみだしてしまわないために、既存の人間的カテゴリーとヒエラルキーに異を唱える立場を採っていると見る事ができるであろう。

VI. おわりに

本稿では、クリティカルなポストヒューマニズムの主張に呼応する考え・ビジョンが欧米のSF文学の中に見て取ることができることを、その歴史を紐解くことを通じて明らかにしてきた。

啓蒙主義の中で生まれた“限界のない人間の改良可能性”という理念とそれを実現しようとするテクノロジーは先駆的作品群においては、外部からの<脅威>であった。20世紀になってからも半ばまでは、必ずしも懐疑と不安という文脈ではないものの、人間とその外部にあり人間を改変するテクノロジーという図式は維持されていた。これに対して、1960年代から1970年代にかけてニュー・ウェーブSFをうみだした作家たちは、ポストヒューマン表象を通じて、人間とは何かという問いを呼び起こし、既存の人間理解に挑戦を試みた。この流れは、テクノロジーと人間が融合したサイボーグ表象が登場するサイバーパンク以降のSFに受け継がれていく。そして、その流れの中から、フェミニストSFなど、

クリティカルなポストヒューマニズムと同様に、＜啓蒙主義的なヒューマニズム＞を批判的に検討する作品群が現れてくるのである。

言い換えれば、こうしたSF文学の流れというのは、クリティカルなポストヒューマニズムが構築されていくに際して重要な＜資源＞であったことを窺がわせる。今後は、21世紀のSF文学に注目し、クリティカルなポストヒューマニズムと呼応する考え・ビジョンがどのように表現されているのか、また、そのビジョンに新たな展開があるのかを探っていきたい。また、そうした作品群を＜資源＞とすることにより、クリティカルなポストヒューマニズムをより深化させていきたいと考えている。

注

- (1) 日本語訳は、鈴木俊洋の邦訳『技術の道德化—事物の道德性を理解し設計する—』（法政大学出版会、2015年）を参考にした。邦訳では、pp.27-32.

SF 作品一覧

- Shelley, Mary (1818) *Frankenstein*. London: Penguin Classics, 2003.
- Shelley, Mary (1833) "The Mortal Immortal." In Betty T. Bennett and Charles E. Robinson (eds.), *The Mary Shelley Reader*. New York: Oxford University Press, 1990, pp.314-326.
- Poe, Edgar Allan (1839) *The Man That Was Used Up: A Tale of the Late Bugaboo and Kickapoo Campaign*. Redditch: Read Books, 2012.
- Hawthorne, Nathaniel (1843) "Birthmark." In New Arvin (ed.), *Hawthorne's Short Stories*. New York: Vintage Classics, 2011, pp.177-193.
- Hawthorne, Nathaniel (1844) "Rappaccini's Daughter." In Newton Arvin (ed.), *Hawthorne's Short Stories*. New York: Vintage Classics, 2011, pp.206-234.
- Wells, H.G. (1895) *The Time Machine and Other Stories*. London: Arcturus publishing, 2018.
- Stapledon, Olaf (1930) *Last and First Men: A Story of the Near and Far Future*. San Antonio: Bibliotech Press, 2012.
- Schuyler, George S. (1936-38) *Black Empire*. Boston, Massachusetts: Northeastern University Press, 1991.
- Vogt, A. E. Van (1940) *Slan*. New York: An Orb Book, 2007.
- Moore, C. L. (1944) "No Woman Born." In Lester del Rey (ed.), *The Best of C. L. Moore*. New York: Taplinger Publishing, 1975, pp.200-242.
- Merril, Judith (1948) "That Only a Mother." In Elisabeth Carey (ed.), *Homecalling And Other Stories: The Complete Solo Short Science Fiction of Judith Merrill*. Frammingham, MA: NESFA Press, pp.11-19.
- Clarke, Arthur C. (1953) *Childhood's End*. London: Tor, 2010.
- Padgett, Lewis [Kuttner, Henry] (1953) *Mutant*. London: Hamlyn Paperbacks, 1979.
- Sturgeon, Theodore (1953) *More Than Human*. New York: Vintage Books, 1999.
- Emshwiller, Carol (1959) "Day at the Beach." In *The Collected Stories of Carol Emshwiller Vol.1*. New York: Nonstop Press, 2011, pp.108-114.
- Armock, Mary (1960) "First Born." eStar Books, 2011.
- Gotlieb, Phyllis (1964) *Sunburst*. Cabin John, MA: Wildside Press, 2016.
- Dick, Philip K. (1965) *Dr. Bloodmoney Or, How We Got Along After the Bomb*. London: Arrow Books, 1987.
- Keyes, Daniel (1966) *Flowers for Algernon*. London: Gollancz, 2002.
- Dick, Philip K. (1968) *Do Androids Dream of Electric Sheep?* London: Weidenfeld & Nicolson, 1988.
- LeGuin, Ursula K. (1969) *The Left Hand of Darkness*, London: Gollancz, 2017.
- Charnas, Suzy McKee (1974) *Walk to the End of the World*. New York: Ballantine Books, 1974.

- Russ, Joanna (1974) *The Female Man*. London: Gollancz, 2010.
- Piercy, Marge (1976) *Woman on the Edge of Time*. London: Del Rey, 2016.
- Pohl, Frederik (1976) *Man Plus*. London: Gollancz, 2004.
- McElroy, Joseph (1977) *Plus*. New York: Carroll & Graf Publishers, 1987.
- Charnas, Suzy McKee (1978) *Motherlines*. New York: Berkley Publishing, 1978.
- Gibson, William (1984) *Neuromancer*. New York: Ace Books, 1984.
- Butler, Octavia E. (1987-89) *Lilith's Brood*. Contained the Complete series: *Dawn, Adulthood Rites, and Imago* (The Complete Xenogenesis Trilogy). New York: Grand Central Publishing, 2000.
- Cadigan, Pat (1991) *Synners*. London: Gollancz, 2013.
- Charnas, Suzy McKee (1994) *The Furies*. New York: St. Martins Press-3PL, 2001.
- MacLeod, Ken (1998) *The Cassini Division*. New York: Tor Book, 1998.
- Charnas, Suzy McKee (1999) *The Conqueror's Child*. New York: St. Martins Press-3PL, 2001.

引用・参考文献等一覧

- Hayles, Katherin (1999) *How We Became Posthuman: Virtual Bodies in Cybernetics, Literature, and Informatics*. Chicago: The University Press of Chicago.
- Haraway, Donna J. (1991) *Simians, Cyborgs, and Women: The Reinvention of Nature*. New York: Routledge. [邦訳：ダナ・ハラウェイ（高橋さきの訳）『猿と女とサイボーグ—自然の再発明—』青土社、2000年]
- Hassan, Ihab (1977) "Prometheus as Performer: Toward a Posthumanist Culture?," *The Georgia Review*. Vol. 31, No. 4, pp.830-850.
- Hauskeller, Michael, Thomas D. Philbeck, and Curtis D. Carbonell (2015) "Posthumanism in Film and Television." In Michael Hauskeller, Thomas D. Philbeck, and Curtis D. Carbonell (eds), *The Palgrave Handbook of Posthumanism in Film and Television*. London: Palgrave Macmillan, pp.1-7.
- Herbrechter, Stefan (2013) *Posthumanism: A Critical Analysis*. London: Bloomsbury Academic.
- Nayar, Pramod K. (2014) *Posthumanism*. Cambridge: Polity Press.
- 根村直美 (2016) 「『イノセンス』に見るポスト・ヒューマニズムと〈身体〉の構築主義」『社会情報学』第5巻1号, pp.73-88.
- Verbeek, Peter-Paul (2011) *Moralizing Technology: Understanding and Designing the Morality of Things*. Chicago: The University Press of Chicago. [ピーター＝ポール・フェルベーク（鈴木俊洋訳）『技術の道德化—事物の道德性を理解し設計する—』法政大学出版会、2015年]
- Yaszek, Lisa and Jason Ellis (2017) "Science Fiction." In Bruce Clarke and Manuela Rossini (eds.), *Literature and the Posthuman*. Cambridge: Cambridge University Press.